

## 2022年1月9日 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 2章 23～28節

説教題：主の下さる安息

一昨年(2020年)の12月に事故に遭ってから車の運転に気をつけるようになりましたが、カナダにいる時にこんな経験があります。車で大きな道を走っていましたが、1本向こうの道に出たかったので、最初の筋を右に曲がりました。そこは初めて通る道でした。そうしたら、曲がった所に学校の門があって、当番のお母さんでしょうか、「30km」と書いた大きな看板を抱えて私の車を睨みつけるようにして見られました。私の注意不足か、恐らくそこは30kmに落とさなければならない区間だったので、「学校だ、しまった」と思って急いでブレーキを踏んだのですが、その女性のお顔から怒りは消えずに、「まったく仕様が無いドライバーだ」という顔をして、ノートを取り出して私の車のナンバーを控えておられました。「子供の安全を守りたい」というお母さんのお気持ちも良く分かりますし、その意味で大変申し訳なかったのですが、しかし、あまり良い気持ちはしませんでした。「悪かったな」という罪責感もあるのですが、同時に「お前の行動を見たぞ！」と言われているような、後味の悪さがありました。

私の些細な経験ですが、イエス様時代の社会というのが正に「どこに目が光っているか分からない」というような雰囲気があったようです。目を光らせていたのは「パリサイ派」と呼ばれるグループの人々です。元々は「私達は神の律法を真面目に守って生きて行きましょう」と集まった人々です。当時のユダヤ教は、「民族としての救い(祝福)」という考え方が強かったようです。「ローマに支配されている状況から民族として救われたい」ということもあったでしょう。だから、そのためには、民族の中に「祝福を損なうような行い」があると困るのです。それで彼らは、自分が律法を守るだけではなく、皆にも守らせようとしたのです。しかし結果として、人々の在り方に目を光らせ、「裁きの目」で人を見る様になって行ったのです。イエス様のグループも、早い段階からこの「裁きの目」の下におかれます。この箇所の記事もそういう雰囲気の中で起こっているのです。

内容に入りましょう。23節に「ある安息日のこと、イエスは麦畑の中を歩いて行かれた。すると、弟子たちが道々穂を摘み始めた」(23)とあります。「安息日」、会堂での礼拝の後でしょうか、イエス様の一行が畑の中を歩いて歩いている時、弟子達が麦の穂を摘んで、手で揉んで食べたのです。「マタイ福音書」によれば、彼らは空腹だったようです。ご高齢の方々は経験がえられるかも知れません。しかし、それを見ている「パリサイ人の目」があったのです。彼らは「弟子の罪は主人の罪」とばかり、イエス様を咎めるのです。「咎める」と言っても、「いきなり罪に定めると可愛そうだから、1回は警告してやる。しかし2回目は、律法違反で石打ちに定めるぞ」ということです。何が律法違反だったのでしょうか。

ユダヤでは、貧しい者は他人の畑の穂を摘んで食べても良かったのです。「隣人の麦畑に入るときは、手で穂を摘んでもよいが、その麦畑で鎌を使ってはならない」(申命記 23:26)と定められていました。だからその点では、問題はなかった。問題は、それが「安息日」だったことです。「律法」には「安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない…」(申命記 5:12~14)と戒められていました。しかし、旧約の歴史の中で「安息日」の律法だけではなく、他の律法も無視されるようになり、その不信仰の中で彼らは「国が滅びる」という悲劇を経験します。「バビロン捕囚」です。やがて自分達の国に帰って来た時、彼ら(特に信仰熱心な人々)は、そのことを反省して、律法を守ることに、特に「安息日」を守ることに情熱を燃やすようになります。しかし、それがエスカレートして、極端なものになって行ったのです。神が与えた「律法」には「安息日の趣旨」くらいしか書かれていないのに、律法学者がそこに色々な決まりを作り足して行きました。イエス様の時代には「安息日」に関する決まりが山ほど(234項との

説がある)―出来上がっていました。弟子達のしたことは、その「細かい決まり」に違反しました。「穂を摘む」ことは「安息日に収穫をした」という違反であり、「手で揉んだ」ことは「脱穀をした」という違反であり…という具合です。私達には馬鹿馬鹿しいことのようにですが、彼らにしてみれば「民族が神の祝福を受けられるかどうか」という死活問題だったので。

それに対してイエス様は何とお答えになったのか。イエス様はここで「Iサムエル記 21 章」の記事を引用しておられます。「ダビデがサウル王の追っ手を逃れて、食べるものにも困り果てていた時、幕屋(移動式神殿)の中で神に供えられていたパンを祭司からもらって食べた」という歴史的事実です。「幕屋」の中には、イスラエル 12 部族を象徴する 12 個のパンが供えられていました。そのパンは 1 週間に一度取り替えられ、取り下げられたパンは、通常、祭司しか食べてはならなかったのです。それが祭司ではないダビデに与えられたのです。ダビデは、自分が食べただけではなく、供の者にも食べさせました。明らかに掟違反です。しかも、パンが取り下げられているところからして、恐らくその日は「安息日」です。しかし「Iサムエル記 21 章」は、その出来事を非難していません。むしろ肯定的な書き方をしているのです。イエス様は「食べ物もなく空腹だった時に、命を支えるために、神の前に置かれていたパン、取り下げられたパンを食べたことで、ダビデが糾弾されたか。そうではないだろう。聖書でも、決りよりも人間の必要の方が優先されているではないか」と問うておられるのです。

そして、イエス様は、聖書が肯定しているこの事実に添えて 2 つのことを言われました。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません」(27)と「人の子は安息日にも主です」(28)の 2 つです。ダビデの例を引いて、そしてこの 2 つの言葉によって、イエス様は何を言おうとしておられるのでしょうか。

イエス様は、まず「安息日は人間のために設けられたのです」と言われました。もともと「律法」の「十戒」の中にある「安息日」の項目には、こうあります。「あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる」(申命記 5:12~14)。さらに「あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである」(申命記 5:15)と続きます。2 つのことが言われています。前半では「安息日には、主人はもとより、雇い人にも家畜にも休息が与えられなければならない。そうやって体を休めなければならない」ということです。{本来「自由に休息を取れる人だけでなく、主人の気持ち一つで休息を取れないような人(女性、奴隷)までが休息が取れる様に」という憐れみの法だったので}。後半は『出エジプト』を思い出して、神によって奴隷の状態から解放され、安息を得ることが出来るようになったことを感謝しながら神と交わりなさい。神の守りがあることを確認しなさい」です。「詩篇 22 篇」にこうあります。「わたしたちの先祖はあなたに依り頼み、依り頼んで、救われて来た。助けを求めてあなたに叫び、救い出され、あなたに依り頼んで、裏切られたことはない」(詩篇 22:5~6)。神の守りを思うと魂が励まされます。いずれにしても「そうやって皆が、体を休めるだけではなく、心もリフレッシュされるように」勧められていた、それが「安息日」の律法の趣旨でした。神が天地をお造りになり、私達人間を造って下さった。それに添えて「安息日」を造って下さった。それは「人がより良く生きるためだ」とイエスは言われるのです。

ところが、それが人を生かすどころか、人を苦しめるものになっている。さらには、人を殺すものになっていたのです。イエス様はそれを悲しんでおられる、いや怒っておられるのです。だからイエス様は続けて「人の子は安息日にも主です」(28)と、「私が安息日の主だ」と言われたのです。これは「あなた方の安息日についての考え方は間違っている。私こそがその本当の意味を教えることが出来るのだ。『憐れみの戒め』、『人を生かす戒め』であることを、心を低くして私に学びなさい」

と訴えておられる、招いておられるということです。

さてしかし、「イエス様が安息日の主です」、この言葉には、もう 1 つの意味もあります。それは次のようなことです。「メッセージ」という聖書は 28 節を「人の子は、安息日を担当している(負っている)」(1:28 メッセージ訳)と訳しています。つまり「私達の安息はイエス様の中にある、イエス様が安息を完成して下さる」ということです。そこで私が思い出すのが「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」(マタイ 11:28~30)の御言葉です。私達は、イエス様の許に行く時に本当の安息に与ることができるのです。イエス様がそうおっしゃるのです。

では、「イエス様の許に行く」とはどういうことでしょうか。基本的には、イエス様を「私の主、私の神」と信じて、イエス様の御手の中に飛び込む、それだけで良いと思います。しかし、この個所の文脈に沿って、さらに 2 つの具体的なことを申し上げます。(これがこの個所の適用となります)。

1 つは「イエス様の御言葉に生きる」ということです。「わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい…わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」(29~30)とあります。ユダヤの人が信仰に関して「くびき」という言葉を使う時、それは「神に従うこと」を意味しました。「負いやすい」というのは、「よく体に合っている、体に合わせて造られているからびったりとして傷がつかない」という意味です。ですから「私が与える教えは、あなたの体によく合っている。あなたを傷つけることはない」ということです。私達には、それぞれに置かれた状況があります。重荷があります。しかし「イエス様を信じ、全ての出来事の中に神の配慮を信じて行くこと、そしてその状況に対してイエス様の教えを持って相対して行くこと、それが私達に安息をもたらす」ということだと思えます。

前にもご紹介した話ですが、ある姉妹は、義理のお母さんとの仲が決定的に悪くなったのです。子供が生まれたのを期に、激しいやり取りの末に別居しますが、ある日、事情があって印鑑を借りるためにお姑さんのところを訪ねたところ、お姑さんがそれを突っぱねて、嫁と姑の憎しみ合いが頂点に達するのです。その後、色々あったのですが、彼女はその頃、誘われて教会に行き、イエス様の言葉を聞くのです。「もし人の罪を赦すなら、あたたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいませ。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません」(マタイ 6:14~15)。彼女は思います。「主よ、感謝します。あなたがこのような罪深い私を赦して下さいましたから、私も姑を赦します。姑が私に和解を求めて来たら喜んで和解します」。そうしたら、またイエス様が語られたのです。「だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したらなら、供え物はそこに、祭壇の前においたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい」(マタイ 5:23~24)。「ああ、主よ。あなたは私が先に赦せとおっしゃるのですか。私から先に和解の手を伸べよ…と」。激しい葛藤の後、彼女はお姑さんに和解を申し出る手紙とプレゼントを贈ったのです。それでお姑さんも喜んで和解に応じて、彼女は、考えることが出来なかった祝福の時を迎えるのです。私達は、イエス様の言葉に従い、生きる時、きっと安息に与るのです。

「イエス様の許に行く」、2 つ目は「イエスの教えて下さった神の見方を持って神の前に出る」ということです。私はある時、「どんなことがあっても、神は、私達の神であることを止められない」という言葉を聞きました。イエス様が教えて下さった神様は、そういう神です、主です。その主の前に出るのです。

かつてキリスト教放送で、ある牧師夫人の証しを聞いたことがあります。この方は大きな教会で、多くの人々に囲まれ、忙しく教会の奉仕に従事していました。しかし疲れがある。何となく上手くいかない。そんな中で彼女は「イエス様と同じものを見ることが出来れば平安がある」と思い、「主よ、あなたが見ておられるもの(聖いもの)を見させて下さい」と祈っていたのです。そんな時、ある「黙想会」に参加して、静まってイエス様と向き合ったのです。その中で、自分の心の中にあるものが見えて来ました。「上手に出来る人々への妬み、嫉妬、怒り、焦り、『どうせこんなことをしたって』という投げやりな思い」、それを見せられた時、彼女は自分のがっかりして、その持って行き場のない気持ちをイエス様にぶつけました。「主よ、私はこんな人間です。こんな人間なんてあなたは要らないでしょう」。しかしイエス様はこう言われたそうです。「わたしは良い羊飼いです。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている…」(ヨハネ 10:14~15)。「あなたがそういう者であることを、私は良く知っている。私はあなたを知っている」。彼女の「あなたをご覧になっているものを見せて下さい」の祈りはこの時に答えられました。主は、彼女の醜さを見ておられたのです。心配して哀れんで見ておられた。しかもその彼女を全く認めながら見ておられたのです。彼女はそれに気付いた時、自分を肯定することが出来るのです。全てを主に知られ、その上で愛されている者として認めることが出来るようになるのです。彼女は安息を得るのです。

イエス様が教えて下さった神様は、こんな神様です。私達は、この主が私の主であることを感謝しながら、正直な心で、主の前に出て、主と交わることが大切なのではないでしょうか。徹底して正直な気持ちで主の前に出ることをしなければ、私達はなかなか変わらないのです。裸の心で主の前に出て、「あなたがどんな者でも、どんなことがあっても、私はあなたの神であることを止めることはない」という神様の声を心に聞くことが大切ではないでしょうか。そこに、本当の安息があるのではないのでしょうか。私は、大きな失敗をして、自分を責めて、心を病みました。しかし、ボロボロの裸の状態で神の前に出た時、心の深いところで「あなたは私の御手の中にいる」という声を聞いて回復が始まりました。平安がやって来ました。私達がどんな者でも、主は私達の神であることを止められません。大切な礼拝の時も、心を開いて、正直な気持ちになって主の前に出たいと願います。そこが、主の安息への入り口です。

もう終わります。イエス様は「私があなたの安息を担当している」と言って下さいました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ 11:8)と言って下さいました。この主に近づいて、本当の「安息日」を頂きたいと願います。主が与えて下さいます。